

「【歴史的仮名づかい】と【現代仮名づかい】を確認しよう！」

①「よろづ」②「応こたふる」③「詣まうでる」を現代仮名づかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

答え①

答え②

答え③

□ 次の問いに答えなさい。

1 【主語と述語】この文はどのように直せば良いでしょう。

①この町の特長は、豊かな自然に恵まれ、どの家庭の水道からも、おいしい水が飲めます。
文の内容を変えないように、傍線部「飲めます」を適切な形に直しなさい

答え①

→他の「推敲」もポイントを確認しよう！

②忘れ物をした原因は、かばんの中身をよく確かめなかった。

田中さんは、②の文末を「よく確かめなかったからです。」と直しましたが、まだちよつと不自然な感じがしています。
さらに適切な形に直して全文を書きなさい。

答え②

2

【語彙と活用】「もどかしい」は「思い通りにならないでイライラする様子」を表す形容詞です。「もどかしい」または、「もどかしかった」を文末に用いた一文を書きなさい。なお、「どのような様子」が「もどかしい」のかが分かるように書くこと。

答え

→聞き慣れない言葉に出会ったら、使い方を調べてみよう。 →「いつか使ってみたい言葉」を集めてみよう。

目 次の【物語の一部】と【図鑑の説明】を読んで、問いに答えなさい。

【物語の一部】

【ここまでであらずし】少年時代、ランプの明るさに驚いた巳之助(みのすけ)はランプ売りになる。暗かった村の家々が明るくなっていくのを楽しんでいたが、やがて町には電気が通り始める。

さてある日、巳之助がランプの芯(しん)を仕入れに大野の町へやってくる。五人の夫婦が道のはたに穴を掘り、太長い柱を立てているのを見た。その柱の上の方には腕のような木が二本ついていて、その①腕木には②白い瀬戸物のたるまさんのようなものがいくつかのついていた。こんな奇妙なものを道のわきに立てて何にするのだろう、と思いつながら少し先にゆくと、また道ばたに同じような高い柱が立っていて、それには雀(すずめ)が腕木にとまって鳴いていた。

この奇妙な高い柱は五十メートルぐらい間をおいては、道のわきに立っていた。巳之助はついに、ひなたでうどんを乾(ほ)している人いきいてみた。すると、うどんやは「電気とやらいうもんが今度(いま)ひけるだけな。そいでもう、ランプはいらんようになるだけな」と答えた。

巳之助にはよくのみこめなかった。電気のことなどまるで知らなかったからだ。ランプのかわりになるものらしいのだが、そうとすれば、電気というものは「あかり」にちがいはあるまい。「あかり」なら、家の中にもせばいいわけで、何もあんなとてつもない柱を道のくろくに何本もおっ立てることはないじゃないかと、巳之助は思ったのである。

それから一月ほどたつて、巳之助がまた大野へ行くと、この間立てられた道のはたの太い柱には、③黒い綱のようなものが数本わたされてあった。黒い綱は、柱の腕木にのつているだるまさんの頭をいまきして次の柱へわたされ、そこでまただるまさんの頭をいまきして次の柱にわたされ、こうしてどこまでも続いていた。注意してよく見ると、ところどころの柱から黒い綱が二本ずつだるまさんの頭のとこで別れて、家の軒端(のきば)のきばにつながれているのであった。

「へへ、電気とやらいうもんは「あかり」がとるもんかと思つたら、これはまるで綱じゃねえか。雀(すずめ)のええ休め場というもんよ」

と巳之助が一人であざわらいながら、知合いの甘酒屋にはいつてゆくと、いつも土間(どま)のまん中の飯台の上につるしてあった大きなランプが、横の壁のあたりに取りかたづけられて、あとにはそのランプをずっと小さくしたような、④石油入

れのついていない、変なかつこのランプが、丈夫そうな綱で天井からぶらさげられてあった。

「なんだやい、変なものを吊したじゃねえか。あのランプはどこか悪くでもなかったかやい」

と巳之助はきいた。すると甘酒屋が、

「ありや、こんどひけた電気というもんだ。火事の心配がのうて、明るうて、マツチはいらぬし、なかなか便利なもんだ」と答えた。

「へッ、へんてこれんなものをぶらさげたもんよ。これじゃ甘酒屋の店も何だか間がぬけてしまった。客もへるだろうよ」

甘酒屋は、相手がランプ売であることに気がついたので、電灯の便利なことはもういわなかった。

「なア、甘酒屋のとツつあん。見なよ、あの天井のどこを。ながねんのランプの煤(すす)であそこだけ真(ま)つ黒(くろ)になつてるに。ランプはもうあそこ居(ゐ)つてしまつたんだ。今になつて電気たらいう便利なもんができたからとて、あそこからはずされて、あんな壁のすみっこにひつかけられるのは、ランプがかわいそうよ」

こんなふうには巳之助はランプの肩をもつて、電灯のよいことはみとめなかった。ところでもなく晩になつて、誰もマツチ一本すらなかったのに、とつぜん甘酒屋の店が真昼(まひる)のように明るくなったので、巳之助はびっくりした。あまり明るいので、巳之助は思わずうしろをふりむいて見たほどだった。

「巳之さん、これが電気だよ」

巳之助は歯をくいしばつて、ながいあいだ電灯を見つめていた。敵(かたき)でもならんでいるようなおつきであった。あまり見つめていて眼(め)のたまが痛くなったほどだった。

「巳之さん、そういうっちゃ何だが、とてもランプで太刀(たち)うちにはできないよ。ちよつと外へくびを出して町通りを見てごらんよ」

巳之助はむつつりと入口の障子(しょうじ)をあけて、通りをながめた。どこの家どの店にも、甘酒屋のと同じように明かるい電灯がともっていた。光は家の中にあまつて、道の上にもまぶれ出(で)ていた。ランプを見なれてきた巳之助にはまぶしすぎるほどのあかりだった。巳之助は、くやしさに肩でいきをしながら、これも長い間ながめていた。

(新見南吉「おじいさんのランプ」による)

※ひけるだけな＝ひけるのだぞうだ。
 ※道のくろ＝道のはし

【図鑑の説明】



一次のAからDまでの巳之助の様子を、【物語の一部】の展開に沿って順番に並べ替えるのとどのようになりますか。Aに続けて、B、C、Dを適切に並べ替えて書きなさい。

- A 電気のことを知らずよくのみこめない。
- B 電灯がたくさんさんの家でもっていることを目にし、悔しさを感じる。
- C 電柱から家に引かれた電線を見て、馬鹿にする。
- D 初めて電灯の明るさに触れ、驚きを感じる。

答え

A ↓ ↓ ↓

二 【物語の一部】に書かれている事柄について、【図鑑の説明】から分かることとして最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 傍線部① 「腕木」とはどのようなものか。
- 2 傍線部② 「白い瀬戸物のだるまさんのようなもの」とはどのようなものか。
- 3 傍線部③ 「黒い綱」とはどのようなものか。
- 4 傍線部④ 「石油入れ」とはどのようなものか。

答え

三 あなたは、【図鑑の説明】を読むことで、【物語の一部】の の中のどの部分についてよく分かるようになりましたか。よく分かるようになった部分と、その部分についてどのようなことが分かったのかを、次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

- 条件1 【物語の一部】の の中のどの部分についてよく分かるようになったのかを明確にして書くこと。
- 条件2 条件1で取り上げた部分について、どのようなことが分かったのかを【図鑑の説明】の内容に触れて書くこと。

答え

↑ 絵をわらわらと見せなさい。自分の絵について上手い下手を書きなさい。

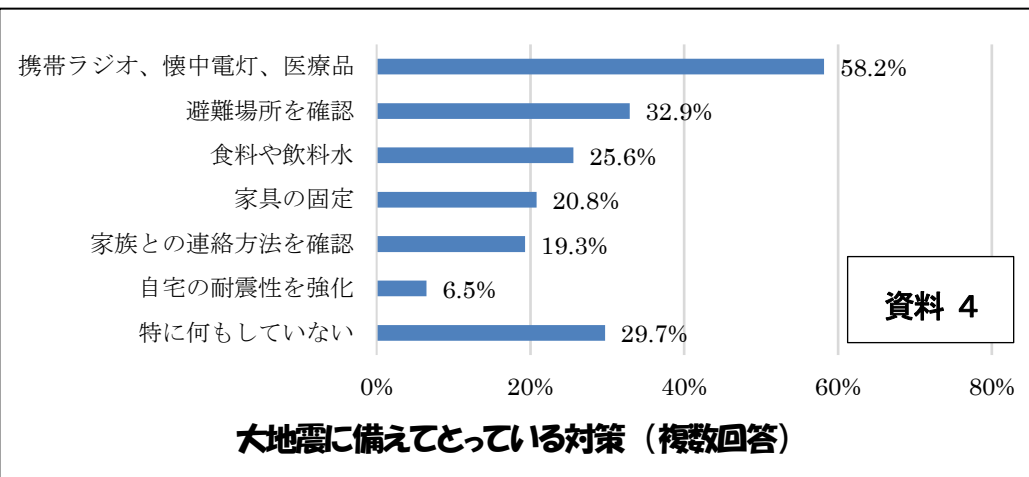
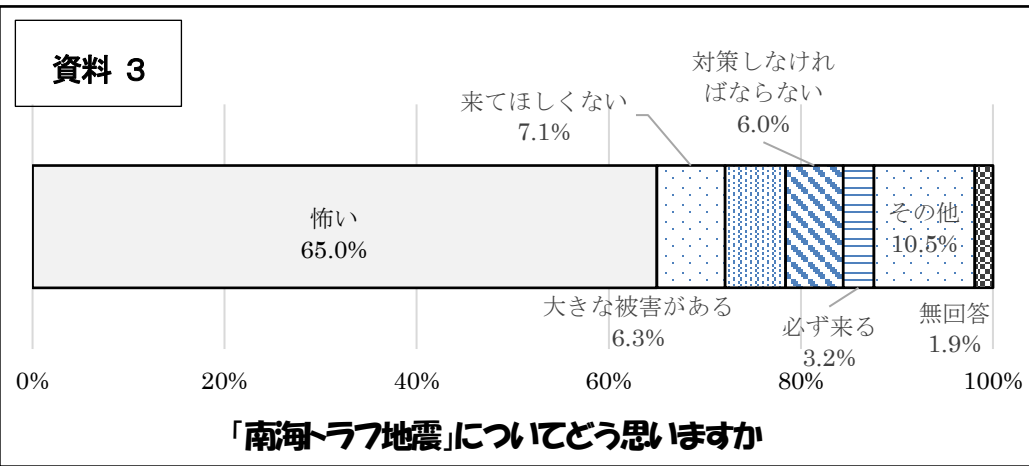
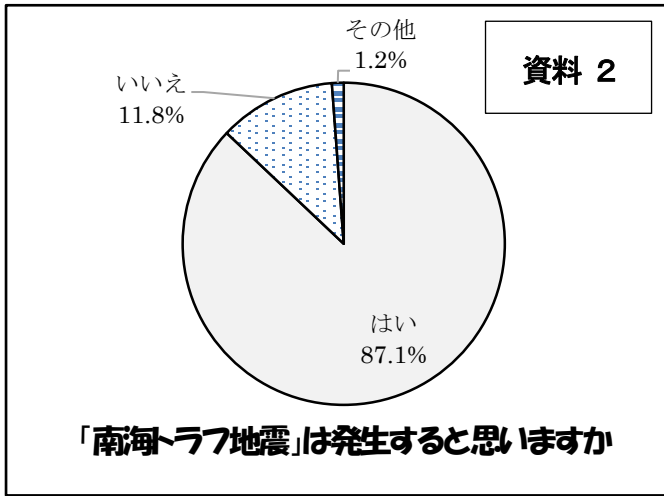
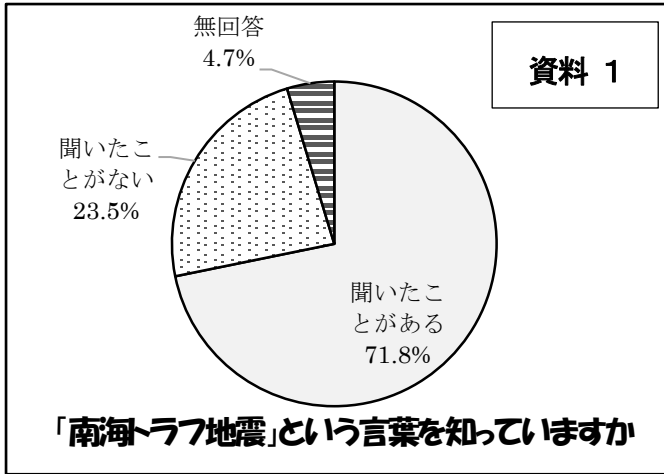
Ⅱ 資料をもとに、自分の意見や考えを書く。

次の資料は「南海トラフ地震」に対する市民の意識調査をまとめたものです。これらの資料から分かることを基にして、今後の「巨大地震への対策」として、あなたが必要と考えることを、次の【条件】にしたがって書きなさい。

- 【条件】①二つ以上の資料を参考にして書くこと。
 ②どの資料から読み取れた内容であるか分かるように書くこと。
 ③二段落以上の構成で書くこと。

メモ

別紙に記入。または「けんいんじゆみょう」



※「南海トラフ地震」

駿河湾から九州東方沖にのびる海底のくぼみ（トラフ）で起きるおそれがある地震。政府は、最も大きなマグニチュード9・1の地震が起きると、21府県で震度6強以上の強い地震、8都県を20メートル以上の津波がおおそうと想定している。